
人魚姫

kko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫

【Zコード】

N6747M

【作者名】

kk0

【あらすじ】

その海で人魚を見たという話が出たのは、割と最近の事であった。一つの船に乗り合わせた五人の客と薬売り、人魚を巡る物語。

序の幕

その海で人魚を見たといつ話が出たのは、割合最近の事であつた。

見た者の話に由れば、何でも沖合いに浮かぶ然して大きくも無い岩の一つに、大層美しい娘が座つているのだと言つ。

死装束の様な白い振袖。しつとりとした濡羽色の髪は結われもせず風に遊び、前髪の隙間から見える顔は蒼白かんぱせ。

裾から覗く脚は、二脚一揃えの人間のそれとは違い、ぬらりと不気味に光る鱗に包まれた。そう、言うなれば蛇か魚の様な一脚。娘は暫く通りかかった船を眺めていたが、やがて音も無く海に帰つていった……。

「……と、言つのがこの辺りで有名なお話で御座います。」

そう締め括ると船主は、分厚い掌をぱんと合わせ頻りと揉んだ。全体的に弛んだ身体をくねらせる様は、其れこそ蛇か魚の様にも見える。

「ほう・・・人魚、とな?」

甲板で船主の言葉を聞いていた客の一人が声を上げた。

如何にも石取りのお武家といった風情の、四角い顔をした中年男だった。

「はい、左様で御座います。」

何故か掌を揉み合わせたまま、船主が卑屈そうに腰を曲げた。低い背丈が余計に縮こまる。

「人魚の肉を喰らうと不老不死になる……と、申しますわねえ。」

四角い男の隣に居た女がねつとりとした声で呟く。化粧も着物も派手だが、目尻や口元には幾分か皺が寄つていて。十年前ならさぞかし美人だったのだろう。

女髪に結つた髪には、過度な装飾が施された簪が、針鼠もかくやと

思われる程刺さつていた。

船主は「はい、はい、その通りで。奥様、博識で御座いますな。」と早口で捲し立てた。

「ねえ、御前様。」

女が強請る様な視線を男に送る。

「おいおい、真逆人魚の肉まさかが欲しいなぞと言つのではないだろうな？」

四角い顎を、矢張り四角い手指で乱暴に擦り、男は嘆息した。女は真っ赤に塗られた口元をにいと上げて笑う。口元の皺が深くなつた。

「その通りで御座いますわ。ねえ、御前様。アタシがいつまでも若くて綺麗きれいだつたら、御前様だつて嬉しいでしよう。」

すつと眼を細め、女は小首を傾げる。簪の飾りがじやらりと音を立てた。

「む・・・う・・・。確かに、嬉しくなくはないが・・・。」

言葉尻を濁す亭主に、女は粘度の高い声で更に強請る。

別段その態度を見かねた訳では無いだろうが、少し離れた場所に居た坊主が不意に口を開いた。

「しかし御婦人、人魚の肉を喰らうと呪われる・・・とも申しますぞ。」

大きくは無いが、良く通る声だつた。浅黒い肌に漆黒の着物。身に着けている物は袈裟から足袋まで真っ黒という可笑しな出で立ちではあったが、纏っている空氣は成る程仏道に帰依した者のそれだった。

着物の色と落ち着いた空氣の所為か酷く老け込んで見えるが、おそらくは其れ程歳は取つていないのだろう。

「の、呪い、ですか！」

船主が揉んでいた手を解いて、仰け反る。裏返つた声は姿以上に滑稽だった。

「でも、結局どちらも言い伝えですよね？」

さして広くもない甲板を物珍しげに眺め回っていた娘が、その年頃特有の甲高い声で割り込んでくる。

「実際に、人魚が居るかどうかも分からないです。」

好奇心の強そうな大きな瞳を忙しなく動かし、娘は坊主の近くで立ち止まつた。

華やかな柄の着物が並ぶと、坊主は愈々（いよいよ）暗い影の様に見える。娘は女にしては背丈が高い様で、坊主と其れ程身長の差が無かつた。

「ええ、ええ、どちらも言い伝えで御座いますとも、ええ。ご心配なさらずに、ええ。」

船主はまた揉み手を始めると、矢張り早口で喋つた。

「あら・・・アタシは呪われても良いから、不老不死になりとう御座いますわ。」

「止めておきなされ。神も濫りに触れなければ祟りますまい。」

未練を見せる女に、黒坊主は厳しい調子で答えた。

「はん、人魚は神じやあありませんでしょうに！」

売り言葉に買い言葉で女の語尾も荒くなる。

暫し、氣まずい空気が流れた。

それを破つたのは、静かな鈴の音だつた。りん。

澄んだ、静かな音色。

釣られる様に、全員が音の鳴つた方を見遣る。

不思議な雰囲気の男が一人、海を眺めて立つていた。

「・・・神も、人魚も・・・似たような、モノ・・・ですよ・・・。」

やや小柄な体躯に反して、低い、それでも澄んだ声。女物であろう白群の小袖を身に纏い、高下駄を履き、長い髪を頭巾で纏めたその姿は非常に特徴的だつた。

りん。

鈴が鳴る。

「・・・人ならざるモノ。和ぎれば神と成り、荒ぶればあやかしと成る。・・・それだけの事です。」

漸く海から視線を外した男の、長く、色味の薄い前髪を潮風が揺らす。現れた白い顔に、女一人が揃つて頬を染める。大層な美男子であつた。

「失礼ではあるが、何方様かな。何時から其処に居つた?」

黒い坊主が鋭い眼光で美丈夫を見据える。美丈夫は薄色の紅を刷いた口元を微かに上げた。

「・・・先刻からずつと、此処に、居りましたが。」

そうして、傍らに置いてある奇妙な紋が入った薬箪笥を指し続けた。

「・・・私は、薬売り・・・ですよ・・・。」

りん。

鈴が、鳴つた。

「そ、そう言えば、まだ皆様のお名前も伺っておりませんで。」

波が高くなつてきた為、甲板から船内の広間に場所を移して、船主は少し吃音ながら車座になつた全員を見渡した。

中年武家とその妻、黒坊主、娘、そして、薬売り。

船の大きさから考えれば、随分と寄は少ない様に思えたが、この船の主たる目的が荷運びであるならば、成る程人間はついでに乗せているだけなのかも知れない。

船主は飽きもせず両の手を揉み合せながら、肉のだぶ付いた背中を丸めた。

「ええ、わたくし若狭屋庄吉郎と申します。ええ、『ご覧の通り、けちな商人で御座います。ええ。以後、お見知りおきをお願い致します。』

若狭屋の隣に座っていた四角い武家がごほんと咳払いをする。

「あー、拙者は四方田益実と申す。小浜藩の藩士である。」

「アタクシは妻の八千代ですわ。」

此處ぞとばかりに踏ん反り返る四方田に八千代は簪をじゅうじゅう鳴らして擦り寄つた。少人数とは云え、人前でふしだらに振舞う様は武家の妻と言うよりは遊女のそれである。

坊主は座禅の様な格好で各々を一瞥し、ぎゅっと畳を伏せた。

「拙僧は鴻寂。行雲流水の修行者だ。」

「あ、あの、雪緒とあります。」

ちらちらと薬売りを盗み見ていた娘が、慌てて居住まいを直す。

その様子を知つてか知らずか薬売りが口の端を上げれば、雪緒は愈々真つ赤になつて俯いた。

ふと、俯いた視線の先に、白い羽を広げた平べつたい鳥の様な形の物を見付け、雪緒はそつと手を伸ばした。

ちりん。

羽の両端に紐でぶら下がつてゐる鈴が、軽やかに鳴る。

「・・・何かしら、これ。

「天秤、ですよ。」

横から真白い手が伸びてきて、奇妙な形の天秤を拾い上げる。長く伸ばされた爪に藤色の爪紅が乗っていた。薬売りの手だった。薬売りが天秤を人差し指に乗せると、其れは雪緒に挨拶でもする様にちりんと鈴を鳴らす。雪緒が破顔した。

「でも、これで何の重さを量るんですか？」

問い合わせながら指で突付けば天秤は緩々と揺れて鈴を鳴らす。無機物である筈の其れが、妙に愛嬌が有る様に思われた。

「・・・これは、重さを量る物では、ありませんよ。」

揺ら揺らと指先で遊ぶ天秤を眺めて、薬売りは言つた。

「これは、距離を測る物・・・ですから。」

「天秤で、距離を？」

雪緒が目を丸くする。

「一体、何の距離を測るんですか？」

「・・・それは・・・。」

雪緒の問いに、薬売りが答えようとした瞬間だった。

りん。

一際高い音を立てて、天秤が大きく傾いた。

来たか。

小さく呴かれたその言葉を、雪緒の耳は確かに捉えていた。

氷の幕

落ちる。
落ちる。

ばしゃん。

水の音。

沈む。
沈む。
沈む。

何かが見えた。

魚。

嗚呼、魚だ。
そう思つた。

沢山の魚が、私を囲んでいる。

大きい魚。小さい魚。
赤い魚。青い魚。

魚。魚。魚。

私は沈む。

私は浮かぶ。

私は動く。

私は止まる。

得も言われぬ浮遊感。

嗚呼、魚が。

沢山の魚が、私を。

私を。

私を、食べている。

* * *

突然響いた強い鈴の音に、広間は静まり返った。
何かに引張られた様に不自然に傾く天秤を見て、薬売りが立ち上がる。

「ぐ、薬売りさん？」

訝しげな雪緒の言葉に答えず、薬売りは静かに天井を仰ぎ見た。否、
仰ぎ見たのは天井ではなく、おそらくは、その更に上。
だん。荒々しく床板を踏み鳴らして、鴻寂も立ち上がった。険しい
視線はじっと薬売りに注がれている。

「・・・薬売り、お主、何者ぞ？」

敵意すら籠つていそうな鴻寂の声にも答えず、薬売りはゆっくりと

視線を巡らせた。暫く後、定まつた視線の先に在つた物は自身の荷物である薬箪笥。

先刻まで何も乗つていなかつた筈のその箪笥の上に、何時の間にやら箱が一つ、置かれていた。

華美な装飾が施された赤銅色の其の箱は、なづわい薬売りを生業とする者が持つには酷く不自然に感じられた。

薬売りが左手を持ち上げると、応える様に赤銅色の蓋が開く。

「ひ、独りでに……」

誰ともなく漏れた驚嘆の声。

開かれた箱の中から、一振りの剣が姿を現す。

箱と同じ赤銅色の柄に鞘。玉石で飾られた其の端には唐獅子にも似た鬼の面。獸の毛か、或いは人毛か、鬼の髪に模された其処には、天秤と同じく鈴が紐で括られていた。

りん。

剣が鳴く。まるで意志を持つてゐるかの様に其の身を浮かせ、薬売りの左手に収まる。

りん。

もう一度剣が鳴つた。

「・・・薬売り、お主、何者ぞ？」

繰り返された鴻寂の問いに、薬売りは今度こそ答えた。

「・・・斬りに・・・来たのですよ・・・」

「何を。」

変わらず厳しい鴻寂の言葉に薬売りはすうと目を細める。

「・・・モノノ怪を・・・。」

りん。

剣が鳴いた。

高かつた筈の波はすっかりと形を潜め、水面は凧の様に静かだつた。
その代わりなのかは分からないが、晴れ渡つていた空はすっかり分
厚い雲に覆われ、まだ昼間であるにも関わらず、薄暗かつた。

船の舳先には女が居た。

死装束の様な白い振袖。しっとりとした濡羽色の髪は結われもせず
風に遊び、前髪の隙間から見える顔は蒼白。
裾から覗く脚は、一脚一揃えの人間のそれとは違い、ぬらりと不気
味に光る鱗に包まれた一脚。

「人魚。」

一同は呆然としていた。

単なる言い伝えと思われていた人魚が、目の前に居るのだ。
其れは手にした櫛で髪を梳き、唄つていた。

「波の隨に搖蕩ふ魚の
鱗光程美しき
水底搖れる海草の
天天たる水花飾り
汐の香りを身に纏ひ 風の啼く音歌声に

ああさ 求むる竜宮の 貝のお宮は今何処

迷ひ惑ひて水の中

案内の龜も見付からず

独り迷ふは海の底

其処も彼処も変わりやせぬ

独り惑ふは闇の底

彼岸も此岸も変わりやせぬ

独り迷ふは海の底

其処も彼処も変わりやせぬ

独り惑ふは闇の底

彼岸も此岸も変わりやせぬ

唄が終わったのか、髪を梳く手を止めて、女は顔を上げた。

死人の様に蒼白い面は、しかし、確かに美しい。

「に、人魚？」

驚きに声を上げたのは八千代だった。

「あれが、人魚……」

ごくりと生唾を飲み込む音がする。

「あれが、あれさえ有れば……不老不死が……永遠の若さが……」

讐言の様に呟いて、八千代は女に歩み寄る。真っ赤な口元が歪に釣りあがつていた。

「……待て。」

薬売りが手で制する。

しかし、八千代は構う事なく歩みを進める。両の手が、女に伸びる。触れる。

「……貴女も……？」

女が呟く。

「貴女も、私の肉が欲しいの？」

血の氣などまるで無い女の唇が歪む。

「貴女も、あいつ等と一緒になのね。私の肉が欲しいのね。永遠の命が欲しいのね！」

語気が、徐々に荒くなる。

「そんなに私の肉が喰いたいなら、喰わせてあげるわ！」

叫ぶ様に言い終えると、女は自身の衿を掴んで乱暴に肌蹴させた。

八千代の悲鳴が、響いた。

「八千代、どうした八千代！？」

四方田が妻の異変に駆け出す。倒れそうになつた妻を抱え、腰に佩^はいた刀を抜く。

しかし、その切つ先が女に向けられる前に、四方田は刀を取り落とした。驚愕に見開かれた其の目に、女の姿が映る。

「さあ、どうしたの。私の肉が喰いたいのでしょう。喰いなさいよ。喰つてご覧なさいよ！」

叫ぶ女の腹から、ぽとりと肉の塊が落ちた。大きな塊が一つ落ちると、釣られた様に小さな塊が続け様に幾つか零れ落ちる。するり。べちやり。

酷い臭いがした。例えるならば、そう、まるで腐り果てた躯の様な。また悲鳴が聞こえた。八千代では無い。悲痛なその叫びは雪緒のものだつた。

「これは・・・酷い・・・。」

鴻寂が搾り出すように呴く。その隣で若狭屋は泡を噴いて倒れていた。

開かれた衿から女の身体が見える。

蒼白いのは、首から上だけだった。

両の乳房は切り落とされ、肩は肉が腐り落ちたのか切り取られたのか所々白い骨が見え、緩んだ帯には裂かれた腹から零れ落ちた腸が辛うじて引っ掛けかれている。

着物に隠れて見えないが、他の部分も似た様なものなのだろう。血と肉の腐った臭いが鼻を衝いた。白かつた着物は何時の間にか赤黒く変色している。

女が、血と融けた肉とで汚れた手を、八千代に伸ばす。

「ほつら、人魚の肉よ。喰いたかつたんでしょう？」

動いた為にはずれた帯から腸が滑り落ちる。

べちゃりと目の前に落ちた其を見て、八千代が再び悲鳴を上げる。女から逃げようとしてか、四方田の腕の中で暴れた。

「や、八千代！」

「邪魔よ！」

逼迫した声が響き、同時にざんと突き飛ばす音が聞こえた。

「え？」

間抜けな声を出し、突き飛ばされた四方田は船の手摺にぶつかった。しかし、突き飛ばされた勢いは止まらず、手摺を乗り越え、男の身体は宙を舞つた。

ばしゃん。

いつそ腹立たしい位、簡単な音だった。

「お、御前様……？」

突き飛ばした本人が、よろよろと手摺に近付く。

「御前様！」

手摺から身を乗り出して、八千代は海面に目を凝らした。しかし、既に四方田の姿は何処にも無い。するり。

背後で音がした。八千代の身体が強張る。

「・・・魚・・・。」

女が呟く。

「・・・この辺りは、魚が多いから・・・。」

べちゃり。

音が近付いた。八千代が振り向く。

女が、嗤っていた。

キット、残ラズ、食べテ貰エルワ。

音が響いた。

いつそ腹立たしい位、簡単な音だった。

肆の幕

私は迎えを待つていた。

歩けぬ脚の私には、それしか術が無かつたから。

私は迎えを待っていた。

幾ら待てども来ないと知つていたのに。

私は迎えを待つていた。

他に何が出来たと言ひつの？

私は、泡に成る為に産まれてきた訳では無かつたのに。

* * *

「薬売り。」

乗客が二人減つた船の上で、鴻寂が抑揚の無い声を上げた。

「モノノ怪を斬りに来た、と申したな。」

「・・・ええ。」

「では、お主が持つている其れが、退魔の剣とやらか。」
肯定する様に、剣がちりりと鳴った。

「貴方達・・・。」

二人が落ちた手摺の傍に居た女が、ゆらりと顔を向けた。
赤黒い着物と、その中身に、雪緒が小さく悲鳴を上げる。

「貴方達も、私の肉が欲しいの・・・？」

「いいえ。」

凄惨な状況に目を背ける事無く、薬売りは否定の言葉を紡ぐ。

「貴女を、斬りに、参りました。」

「・・・私を、斬りに？」

女の首が、可笑しな方向に傾く。首を傾げたのかも知れない。

「・・・あ、あは、あはは、あははははははは・・・。」

女が笑う。髪に隠れて、どんな顔なのが分からぬ。

何処と無く、哀しげに聞こえたのは気のせいか。

「あははは・・・私を、斬りに・・・あはは、はは・・・。そ、

私を、殺しに来たのね？」

「いいえ。」

即座に返された否定に、女は顔を上げた。

「清め、祓いに、來たのですよ。」

「祓いに・・・？」

「この地、この縁より、貴女を、解き放つ為に。」

ちりん。

清らかな音を立てて、鈴が鳴った。

「貴女を、お迎えに上りました・・・人魚姫。」

「迎え・・・に・・・？」

震える声で呟かれた言葉。

潮風に揺られた髪の間から覗く瞳からは、一粒の涙が、伝つていた。

かちん。

退魔の剣が歯を鳴らした。

* * *

産まれた時から無かつたのか、産まれた後に失つたのか、私には脚が無かつた。

父母から、否、村中から疎まれているのであるう事は、何となく理

解していた。

そうでなければ、こんな狭く暗い場所で、畜生の様に暮らしてはいないだろう。

日に一度、僅かばかりの食物を置きに来る時以外、人の顔を見る事も無かつた。

その一度も、やがて無くなつた。

飢餓だと、誰かが呟いたのを聞いた気がする。
食事が無くなつてからどれ位経つたかも定かでは無いが、ある日、私は大勢の人間の顔を見た。

その中の一人が私を指差して言った。

生贊だ、と。

その意味すら解らぬ儘ままで、私は引き摺つて行かれた。

海が見えた。綺麗きれいだと思った。

父母の笑つた顔を、その時初めて見た気がする。

海神様への奉げ物だ。

そう言つて笑つた父には歯が殆ど無かつた。

大きな俎まないたの様な場所に私は置かれた。

私を囮んだ人達は、皆一様に包丁を手にしていた。

死に難い場所から。誰かがそう言つた。

順番など覚えていない。

私は少しづつ切り取られ、切り取った部分は海に投げ込まれた。

死んだか？

そんな声を、とても遠くで聞いていた。

じゃあ、棄てる。

あれは誰の声だったのだろう。

ばしゃん。

下らない事を考えながら、私は海に落ちた。

嗚呼、魚が。

魚が私を、食べている。

大詰め

かちん。

澄んだ音がして、私は我に返つた。

何も無い場所だつた。

ただ、暗くも狭くも無い。

其れだけでも、あの場所よりずっと良いと思える。

何も無い場所に、光が見えた。

あの時に見た海とよく似た金色の光。

光は人の形を取つていた。

左の手に一振りの剣を携えて。

嗚呼、私はこの光を待つていたんだ。

「魚に、成りたかつたんですね。」

そうか、と低く澄んだ声が返つてくる。

「きらきらと、綺麗だと思つたんですね。鱗が光つていて。」

私を囲んでいた魚を思い出す。色とりどりの魚が金色の光を受けて踊つている。

だから、魚に成れば、綺麗な場所で、綺麗な姿で居られる。

そう思つたのに。

「でも、海は暗かつた。」

私が居たあの場所と、全然変わらない。

だから。

だから、ずっと、私は迎えを待っていた。

私は光を待っていた。

「・・・永い間、お待ち申し上げて居りました。」

目の前の光に、私は深深と頭くびを垂れた。

* * *

満月だつた。

暗闇に、ぽつかりと開いた光の穴。

その光を映す海に、雪緒は摘んで来た花を投げた。

「・・・其れは、誰への手向けなのだ?」

鴻寂の問いに、雪緒は静かに首を振る。

「分かりません。」

人魚。八千代。四方田。誰への手向けだと言つても嘘になつてしま
いそうな気がした。

黙祷を奉げる雪緒の隣で、鴻寂が経を上げる。

「・・・其れは、誰への、手向けなので・・・?」

雪緒に問うた鴻寂の言葉を、薬売りは其の儘彼に返した。

「分からぬ。」

目を伏せたまま、鴻寂は答える。

「・・・薬売りよ。あの娘の魂は、救われたのか?」

「・・・さあ・・・私には、分かりませんね・・・。其れこそ、鴻

寂殿、貴方の御役目、なのではありますか。」

薬売りがついと月を見上げる。

ひらりと蝶が一頭、夜空を舞つた。

「私は・・・私は、救われたと思います。だつて、人魚さん・・・」

泣いていたもの・・・」
波の音が聞こえる。

寄せては返すその音は、絶えず夜空に響いて、まるで唄の様だった。

波の隨に揺蕩ふ魚の 鱗光程美しき

水底揺れる海草の 天天たる水花飾り

汐の香りを身に纏ひ 風の啼く音歌声に

さあさ 求むる竜宮の 貝のお宮は今何処
迷ひ惑ひて水の中 案内の亀も見付からず

独り迷ふは海の底 其処も彼処も変わりやせぬ

独り惑ふは闇の底 彼岸も此岸も変わりやせぬ

独り迷ふは海の底 其処も彼処も変わりやせぬ

独り惑ふは闇の底 彼岸も此岸も変わりやせぬ

空の隋に輝く月と 星の光どが囁くは
もう直迎えの蝶々が 御前の案内に行くからと
花の香りを印に 鈴の啼く音従えて

さあさ 求むる竜宮の 貝のお宮は此方ひがしだと
ひらりひらりと雲の中 案内の蝶は微笑んで
共に向ふは空の上 海もお空も変わりやせぬ
共に歩むは月の上 彼岸の此岸も在りはせぬ
共に歩むは月の上 彼岸の此岸も在りはせぬ

辿り着いたは空の果
彼岸の此岸も在りはせぬ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6747m/>

人魚姫

2010年10月11日00時02分発行